

親子で参加する「親プロ」講座の活用 ～親子のコミュニケーションを支えるために～

広島県立生涯学習センター
社会教育主事 一本木 実香

1 はじめに

近年、有害情報の氾濫等による環境の悪化や、不登校、ひきこもり、ニート、非行等により、社会生活を円滑に営む上での困難を有する子供・若者の問題が深刻な状況にある。こうした状況を踏まえ、広島県では、社会生活を円滑に営む上での困難を有する子供・若者の支援を始め、全ての子供・若者の育成支援を社会全体で総合的に推進していくことを目的とする「広島県子ども・若者計画」が平成24年3月に策定されている。その施策方針の一つに、「子ども・若者の健やかな成長を社会全体で支えるための環境を整備する」があり、「家庭教育における支援」が位置付けられている。この家庭教育支援策として、広島県立生涯学習センター（以下「センター」という。）では「『親の力』をまなびあう学習プログラム」（以下「親プロ」という。）を活用した支援に取り組んでいるところである。

かつて私は、児童自立支援施設に勤務していた。そこでの経験の中で、家庭や学校などで適応困難にある子供たちの多くが、その背景に家庭での養育上の問題を抱えていることが多いことや、自分の行動や気持ち、考えを言語化して相手に伝えるコミュニケーションが苦手であることを知った。そして、子供が不適応行動に気づき、適応的行動をしようと自ら意識するようになるためには、家庭環境の調整と親子の信頼関係の構築が重要であり、その契機となるのは、子供と親（保護者）が自分の本音を言葉で伝え合う機会をもつことであることも、そこで学んだ。

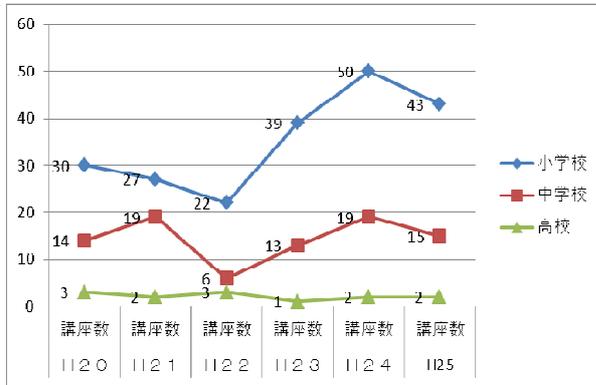
その後、中学校勤務を経てセンターで家庭教育支援を担当して二年が経過するうち、特に中学生において、他者への思いやりや共感を育むには、一番身近な親（保護者）から大切にされているという実感を得ることが大切であり、「親プロ」がその一助になるのではないかと考えるようになった。生活に密着した場所であり、子どもたちが全員通う場所であり、地域に身近な場所でもある学校で、親子の絆を確かめ合う「親プロ」のプログラムを実施することにより、多くの子供たちの様々な問題行動を未然に防止し、より安定した家庭生活を営み、親子関係を築くことになるのではないだろうか。

そこで、本研究では、学校での「親プロ」の普及の現況を踏まえ、特に効果的と思われる学校等での「親プロ」講座を事例紹介、分析し、学校等での新たな「親プロ」の活用方法を提案したい。

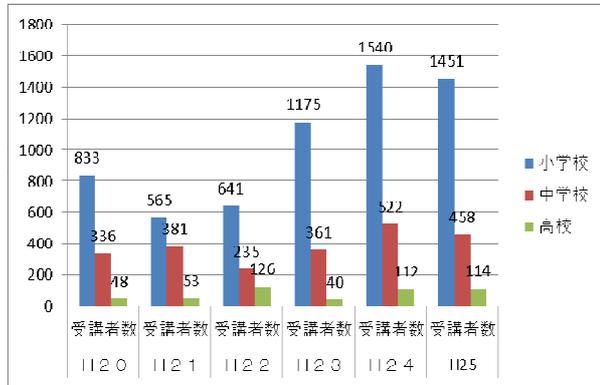
2 学校での「親プロ」の普及の現況

(1) 学校での「親プロ」講座数と受講者数

(平成 25 年度は 3 月 4 日現在で実施見込みを含む。)



図表 1 「親プロ」講座数



図表 2 「親プロ」受講者数

県では、「親プロ」の普及を平成 20 年度から開始し、平成 20 年度から平成 22 年度は、講座数の目標値を定め、目標値に向けて取り組んだ。その結果、小学校・中学校の保護者懇談会・PTA 研修会など、様々な場面で「親プロ」が活用されることとなった。

平成 24 年度には、学校での講座の普及を図るために、学校向け、PTA 向けリーフレットを作成、配布した。また、校長研修会での「親プロ」についての説明やリーフレット配布、PTA 連合会総会でのリーフレット配布、PTA 連絡協議会での講座実施などを行った。その効果もあり、平成 24 年度は、学校での講座数、受講者数が大幅に増加した。

「親プロ」全講座のうち、学校で行われた講座が占める割合は、講座数、受講者数がこれまでのうち最も多かった平成 24 年度では、講座数は 25.9% であり、受講者数は 26.9% であった。平成 25 年度では、講座数は 21.8%、受講者数は 32.7% である。

学校で行われる講座は、保護者、PTA 役員を対象にした PTA 主催の講演会・研修会、地区懇談会、学年懇談会がほとんどである。「親プロ」には、「中学・高校生などの青少年対象」の教材が 3 種類あるが、これまでに中学生を対象に「親プロ」講座が行われたことはない。高校生を対象に行われた講座は 1～3 件/年であり、ほとんど活用されていない。

(2) 実施主体別の 1 講座当たり平均受講者数

図表 4：実施主体別の 1 講座当たり平均受講者数

実施全体	全体	子育てサポートステーション	子育て支援グループ	市町	公民館	幼稚園・保育園	小中学校
H25年度	18.2	3.0	11.1	18.3	9.4	16.3	43.9
H24年度	24.0	7.9	13.8	17.4	20.3	22.2	35.7

実施主体別の 1 講座当たり平均受講者数を見ると、平成 25 年度と 24 年度共通して、小中学校の平均受講者数が際立って多いことが分かる。小中学校での講座の実施数が、全体の受講者数の動向に極めて大きな影響を及ぼしていることが分かる。

(3) 学校での活用頻度が高い教材

図表 5：学校で活用された「親プロ」教材と件数（平成 20 年度～平成 25 年度）

順	小学校		中学校		高校	
	教材番号	件数	教材番号	件数	教材番号	件数
1	18	55	20	25	20	4
2	15	23	21	23	19, 21	2
3	14	20	19	12	2, 3, 26	1
4	16	21	18	8		
5	17	18	16	2		

参考（【プログラム一覧表】を一部改作）

⊕ 【プログラム一覧表】

「親の力」をまなびあう学習プログラム～寄って、話して、自ら気づく～
 全体のねらい＜自他の子育てを振り返り学び合うなかで、親が「自ら気づき」「自らまなべる」力を高める。＞

段階 <ねらい>	対象 <ねらい>	教材番号	教材のタイトル <ねらい>
「自分の親は将来の自分」期 (子育て準備期) ＜自分の親子関係を振り返るため、親となる自分を想像することで、これからの自分の生き方を考える。＞	「親はウルサイけどアリガトウ」編 (中学・高校生などの青少年対象) ＜親の立場を想像しこれまでの自分を振り返ることで、これから親となるであろう自分の生き方を考える。＞	1	おぎゃーってスゴイ！～生まれてきた自分、やがて生まれてくる命～ ＜親を自分の子どもに見立て、命の大切さと、親として命に関わることの責任の重さを考える。＞
		2	親しらず 子しらず～親子関係を振り返る～ ＜自分の親子関係を振り返り、親の役割や気持ちについて考える。＞
		3	おや！ おや？～自分のあゆみと親のかかわり～ ＜「自分史」を作るなかで親との関係を振り返り、将来どんな親になりたいかを考える。＞
「過ぎてしまえば一番幸せ」期 (子育て前期) ＜子どもがいる生活を受け入れるとともに、子どもの成長の過程を余裕を持って楽しみ、子どもをしっかりと受けとめる。＞	「ワクワク・ドキドキ」編 (小学1～3年生の親対象) ＜子どもを多様な価値観で受けとめ、自ら伸びようとする芽を見つけて、成長を支援する。＞	13	親子でやってみよう！～楽しい小学校生活を過ごすために～ ＜子どもが楽しい授業に慣れ、小学校生活を楽しく過ごすために、親子で取り組むことについて考える。＞
		14	くらべないで！～同じ子どもなんて一人もいない～ ＜他の子どもと比べることの効果を考え、自分の子が持つかけがえない価値を再認識する。＞
		15	みなおして！～多様な視点から子どもを見る～ ＜多様な視点から見ることにより、心に余裕が生まれることに気づく。＞
「親子で登る自立の坂道」期 (子育て後期) ＜子どもの成長を見守り、受け入れるなかで、親も共に成長しようとする姿勢を持つ。＞	「子が親離れしていく」編 (小学4～6年生の親対象) ＜子どもの心身の変化を理解し、子どもの主体性を伸ばす親のあり方について考える。＞	16	体と心の変化～子どもの思い、親の戸惑い～ ＜子どもの成長に戸惑う自分をみつめ直し、自立しようとする子どもの気持ちを受け入れることについて考える。＞
		17	どうする？ どういう？～子どもの人間関係かかわり～ ＜子どもの交友関係への親の適切なかかわり方について考える。＞
		18	さあ、どっち！？～信じる、見守る、待つ、聞く～ ＜反抗期等多様な時期の子どもとの話し方から、親子のより良いコミュニケーションの取り方について考える。＞
		19	思い出してみよう～私にもあった青春時代～ ＜自分の青春時代を思い出し、子どもの思いに寄り添いつつ言葉を添える術を考える。＞
		20	キャッチボールは得意ですか？～気持ちを伝える 御礼のやりとり～ ＜遠慮通話を返る親子のロールプレイを通して、子どもと気持ちを通じ合うことの難しさと大切さを学ぶ。＞
21	ほどよい距離感って？～子どもの自立と親の自立～ ＜子どもの自立を適切に支援できるような、親のほし方について考える。＞		

【新規開発教材】多様化する現代的課題に対応した新規開発教材です。

対象	教材番号	教材のタイトル <ねらい>
乳幼児～高校生の父親	25	お父さんの子育てトーク！～「父親」の楽しみを持ち寄ろう～ ＜父親として子育てにかかわることの楽しさを語り合い、自分なりにできることを考える。＞
小学生～高校生の親	26	ケータイ！ウチではどうする？～考えてみて、わが家流のつきあい方～ ＜子どもの携帯電話利用実態について話し合い、どうすれば子どもが携帯電話と上手に付き合えることができるかを考える。＞
子育て期の親、働く人など	27	向き合ってみよう～「仕事」と「子育て」の両立のために～ ＜仕事と生活（子育て）の両立を図り、子どもの健康と向き合うことの大切さについて考える。＞

⊕ 【アレンジ版教材】新たな学習需要に応じて、基本の 24 教材をアレンジした教材です。

対象 <ねらい>	教材番号	教材のタイトル <ねらい>
「親はウルサイけどアリガトウ」編 (中学生・高校生などの青少年対象)	2-2 アレンジ版	親しらず 子しらず～親子関係を振り返る～ ＜自分の親子関係を振り返り、親の役割や気持ちについて考える。＞ アレンジ内容：中学生により身近な内容となっています。

小学校での講座用として、ファシリテーターが最もよく活用している教材は教材 18 番である。この教材は多感な時期を迎える子供の気持ちを理解し支えることや、親子のより良いコミュニケーションの取り方を考える内容である。この教材はマンガを読んで考える内容になっており、参加者にとって読みやすい教材づくりがなされている点も利用頻度の高い理由ではあろうが、親子のコミュニケーションについての学び合いが、小学生を持つ保護者に必要だと考えられていることも理由であると考ええる。

中学校では、中学生・高校生の親を対象にした 19, 20, 21 といった教材の利用頻度が高い。しかし、小学校でも利用が多かった教材 16 番や教材 18 番という、もともと小学 4 年から 6 年生の保護者を対象に想定している教材もしばしば活用されている。このことから、中学校でも、親子のコミュニケーションをどうとったら良いのかを学び合うニーズが強いことがうかがわれる。

このように、小学校、中学校での「親プロ」講座では、「子供を取り巻く様々な問題や、親子のコミュニケーションについて」の学び合いが求められており、実際に多くの保護者に家庭教育支援の機会が提供されてきていることが分かる。

しかし、親子でのコミュニケーション方法を学ぶ機会であるにもかかわらず、その機会が PTA 主催の講演会・研修会、地区懇談会、学年懇談会といった親（保護者）のみが参加する機会にとどまってしまっていることは、問題点として指摘することができよう。子供が自分の本音を言葉で親（保護者）に伝え、親（保護者）も言葉で子供に気持ちを伝え返す機会を家庭の中で確保することは、親子関係に困難を抱える家庭であればあるほど、時間的にも、心情的にもなかなか難しい。次章では、こうした親（保護者）と子供とが直接的にコミュニケーションを図る契機となるような「親プロ」の活用方法について模索していきたい。

3 親子で参加する「親プロ」講座の事例紹介

平成 25 年度に学校で行われた「親プロ」講座のうち、親子で参加することが企図された講座は残念ながらない。しかし、学校以外の講座機会では何事例か確認できている。そこでその中の 2 例を紹介し、その講座に共通する特徴から、親子で参加する「親プロ」講座の可能性について考えてみたい。

(1) 事例①

【場所】 広島市楠那公民館（子供防犯教室）

【期日】 平成 25 年 10 月 5 日（土）10:00～11:30（90 分）

【実施機関・団体等】 南防犯組合連合会楠那支部・楠那学区子供会育成協議会
広島市楠那公民館

【参加者数】 22 人（小学生の親子）

【テーマ】教材:26 ケータイ！ウチではどうする？

～考えてみて、わが家流のつきあい方～

【講師（ファシリテーター）】 広島市「親プロ」ファシリテーター2名

【経緯】

講座を企画した楠那公民館の職員は、平成22年度社会教育主事講習【B】の修了者である。講習に参加していた際、「親プロ」を知った。勤務先で防犯教室を企画するに当たり、親子別に携帯電話の正しい使い方を学ぶのではなく、親子一緒に携帯電話の使い方について考えることが、子供たちの携帯電話やスマートフォン等の利用を巡る喫緊の課題の解決のためには必要なのではないかと考え、携帯との付き合い方について考える内容の「親プロ」教材26番を活用し、親子一緒に講座を行いたいとの旨でファシリテーター派遣の依頼があったものである。

広島市在住のファシリテーターに講座を依頼し、快諾していただいた。なお、ファシリテーターの

うち1名は、「広島市電子メディア協議会」の電子メディア・インストラクター（保護者や教育関係者を対象に、青少年が電子メディアを利用する場合の問題点や、適切な利用方法、指導方法などの学習を通じて、啓発事業やネット中の子供たちの見守り活動（ネットパトロール）を実施する。）（参考文献⑤）としても活躍されている。

講座の実施に当たっては、親子一緒に行う講座展開について、公民館職員とファシリテーターで複数回の打ち合わせが行われた。参加募集は、公民館だよりへの掲載や、チラシの配布を通して行われた。講座当日は、小学校区別の別の行事と重なったものの、親子22名が参加した。

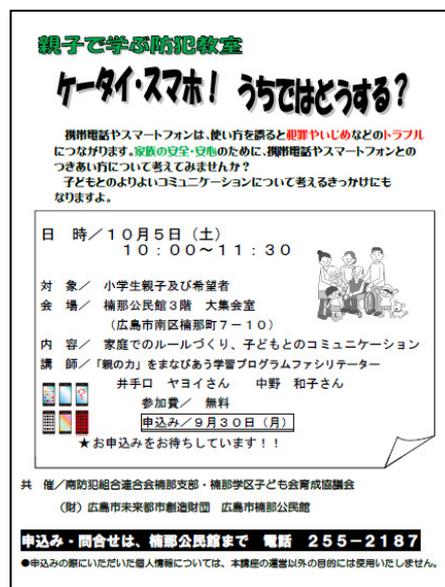
【講座の様子】



楠那公民館での講座の様子①

ファシリテーターの自己紹介、「親プロ」の主旨・ルールなどの説明（講座の様子①）、アイスブレイク、教材（ワークシート）の説明が行われた後、「ケータイマナークイズ」が行われ、ケータイについて学び合う雰囲気を作られた。

次に、親子別でのグループワークが行われた。子供グループは、ファシリテーター1名が進行役



「親子で学ぶ防犯教室」のチラシ



楠那公民館での講座の様子②



楠那公民館での講座の様子③

になり、「ケータイ・ゲームがあると良いこと、便利なこと、助かることはどんなことですか?」「ケータイ・ゲームがあると困ること、気になること、叱られることはどんなことですか?」「ケータイ・ゲームを持ったらどんな使い方をしますか?」について話し合った(写真②)。一方、親は、子供のケータイ・ゲームの使い方で気になること、親子のコミュニケーション等について話し合いを行った。

意見交流では、まず、親が話し合ったことを子どもに紹介し、最後は子どもたちが話し合った意見を親の前で全員で発表した。(写真③)

ファシリテーターは、小学生が参加する講座のために、子供用に「親プロ」の約束を記した掲示物を作成した。また、主催者は、子供用アンケートを作成、配布した。室内には、携帯電話やスマートフォンなどについての新聞記事が掲示された。

【参加者(保護者)の声】

- ・話しやすい雰囲気、時間があっという間に過ぎていきました。私が思っている以上に、スマートフォンや携帯電話の使い方について、子どもなりに考えていることが分かりました。自分で考えて、判断し、行動できる大人に育てていけるように、まず考える場を家庭で作ろうと思います。
- ・子供たちは、きちんと良い事、悪い事の区別がついているのだと感心しました。
- ・子供が、思ったより、携帯電話やゲームの使い方を理解していることが分かり、安心しました。
- ・子供と一緒に一つの事を考えるきっかけとなり、とても良かったです。
- ・今後とも親子でしっかり話し合って、将来、子供に携帯電話を持たせる時に活かしたいと思います。とても役に立つ講座でした。

【参加者(子供)の声】

- ・いろいろな意見が出て良かったです。 ・大きな声で発表できて良かったです。
- ・自分の身を守る良い勉強になりました。
- ・いろいろなことが頭の中に入って、すごくうれしくて、良かったです。
- ・ケータイやスマホはいざという時に使いたいです。

【ファシリテーターの声】

- ・子供の意見は親の想像以上にしっかりしていたようである。親の安心感と子供への信

頼感が増すことは、親子同室でのワークショップの長所であると思う。

楠那公民館での「親プロ」講座の特徴は、①「親子一緒に講座であること」、②「『親プロ』教材を一部活用した講座であること（小学生の親子で、親子同室でのワークに沿った内容にするために、教材（ワークシート）はグループワークの導入として使用し、持ち帰り、講座後の参考にしてもらうようにした）」、そして一番大きな特徴は、③「携帯電話等との付き合い方について考えること以上に、親子のコミュニケーションについて考える内容の講座であったこと」である。

携帯電話を子供に持たせる際のルール作りのポイントの一つに「親子で一緒に考える」ことが挙げられる。この講座では、そうしたポイントを踏まえ、親子のコミュニケーション作りのきっかけを与える展開がなされた。その結果、親にとっては、【参加者（保護者）の声】の波線部にあるように、子供の新たな一面を見て、子供に「安心した」「感心した」と感じるに至った。また、「考える場を家庭で作る」「子供と一緒に一つのことを考えるきっかけになった（親子で一緒に考えることが大切だと分かった）」「今後とも親子でしっかり話し合う」といった、より良い親子関係構築に向けてのヒントも与えた。

携帯電話等の正しい使用に関する講座は、一般的に、利用に伴う危険の周知や、正しい利用方法の説明、携帯利用に係るルール作りに当たってのヒントの提示がなされ、保護者と子供がそれぞれに電子機器についてよく把握し、電子メディアを利用する際のルールやマナー、付き合い方を家庭でよく話し合うことが大切であるとまとめられることが多い。その内容は、親子一緒に、又は親子別で講師の話聞くことが多い。特に子供は学校での非行防止教室等を通じて知ることが多い。

この講座は、携帯電話の利用に伴う危険性をゲーム形式で親子一緒に確認し合い、認識を共有し合うだけでなく、親子のよりよいコミュニケーションが携帯電話の利用を巡る問題を含め、様々な問題から子供を守ることにつながることを、頭だけでなく、実際の行動にまで高めるものとして理解されたと思われる。

（2）事例②

【場所】東広島市三ツ城コミュニティハウス（親子ふれあい日曜日 in 三ツ城）

【期日】平成25年11月24日（日）9:30～13:00（「親プロ」講座は90分）

【実施機関・団体等】三ツ城コミュニティハウス

【参加者数】22人（小学生高学年の親子）

【テーマ】東広島市独自教材：東広島1 親子ってこれでいいの！？

～信じる、話す、待つ、聞く～

【講師（ファシリテーター）】東広島市「親プロ」ファシリテーター1名

【経緯】

三ツ城コミュニティハウスは、東広島市立三ツ城小学校内にある唯一の社会教育施設である。

三ツ城小学校の保護者が繰り返し「親プロ」講座に参加する中で、「言いたいことを肯定的に聞いてもらえ、周りの人の意見も聞ける『親プロ』は気持ちがあすっきりする」、「転入してきて周りにどんな人がいるか全く分からなかったが、話し合うことで顔見知りになれた」、「同学年の人だけでなく他学年の人と話ができることが新鮮であり、特に上級生の子供を持つ方からの話は参考になることの連続であった」と感じ、講座を受講する立場から、今や「親プロ」ファシリテーターとして東広島市内で活躍している保護者が数名いる。

「親子ふれあい日曜日 in 三ツ城」のチラシ

平成25年度には、「東広島市子育て応援プロジェクトチーム和～なごみ～」を結成し、定例会を実施している。また、三ツ城コミュニティハウス内で保護者同士が「親プロ」に参加しながらお茶をする「和（なごみ）カフェ」が開催されている。6月には子供が入学して2か月後の保護者対象に、3月には入学前の保護者を対象に開催され、プロジェクトチームメンバーの「親プロ」ファシリテーターの経験から、子供の小学校入学に当たっての不安を少しでも解消できるような保護者同士の話し合いの場が必要なのではないかとの思いがきっかけで始まったものである。参加した保護者は、お茶をしながら話し合い、和気藹々とおしゃべりをする中で、「不安なのは自分だけではなく、皆同じことを考えているのだ」と入学前の保護者の不安を軽減する機会となっている。

「和（なごみ）カフェ」のチラシ

プロジェクトチームでは、「和（なごみ）カフェ」や「親プロ」講座の展開について、より良い内容作りに向けた話し合いも行われている。また、小学校内にある社会教育施設である特性を生かし、小学校の参観日と抱き合わせで行う「親プロ」講座の実施も予定されている。このように、三ツ城コミュニティハウスでの「親プロ」は、意欲的で自主的な活動を続けており、いわば「親プロ」のパイオニア的存在である。

この講座は、プロジェクトチームの「お互いの話を聞くなど親子のコミュニケーションが大切なのではないか」「よりよい親子関係のためには親子の絆が大切ではないか」という発想から、親子一緒に「親プロ」を活用して意見を交流し合う内容の講座として企画された。

講座の実施に当たっては、子供が講座に参加するために、「親プロ」教材 18 番を小学生向けと保護者向けに一部改作した独自教材を作成した。また、子供グループの話し合いの進行を務めるために、ボランティアとして、地域の大学生の参加を呼び掛けた。参加募集はチラシの配布を通して行われ、小学校高学年の親子 10 組、計 22 名が参加した。

【講座の様子】



三ツ城コミュニティハウスでの講座の様子①



三ツ城コミュニティハウスでの講座の様子②

緊張をほぐし、リラックスして講座を始められるよう、参加者全員での簡単なゲームをまず行った(写真①)。身振り手振りでお互いに誕生日順を伝えて誕生日の早い人から順に並んだ。順番に並ぶことができた分かるやいなや、参加者からは歓声が上がった。

緊張がほぐれて笑顔が見られるようになってから講座がスタートした。独自教材を活用し、小学生と保護者がそれぞれ別のグループに分かれて、よりよい親子関係について本音トークを繰り広げた。小学生のグループでは、大学生2名がそれぞれ進行役を務め、話し合いを盛り上げた(写真②)。

意見交流では、子供からお父さんお母さんへのメッセージ、お父さんお母さんから子供へのメッセージをお互いに聞き合った。

講座の後半には、三ツ城小学校 PTA ボランティア「食育くらぶ」の協力で、親子の絆をむすぶ「親子一緒におむすびづくり」が行われた。

講座アンケートによると、「みんなで話し合うことは楽しかったですか。」の問いに対し、「楽しかった」と答えた小学生、保護者の割合は 100%であった。「今日話し合ったことは、これからの生活に役立つと思いますか。」の問いに対しては、「役立つ」と答えた人の割合は、小学生が 90%、保護者は 100%であった。

三ツ城コミュニティハウスでの講座の特徴は、①「親子一緒に話す講座であること」、②「『親プロ』教材を小学生と保護者向けに一部改作したワークシートを用いた講座であること」、③「大学生や PTA ボランティア「食育くらぶ」など、「地域の人材を生かした講座の展開が

行われたこと」である。

改作されたワークシートでは、子供には「あなたにとってお父さんお母さんはどんな存在ですか」と問いかけ、保護者には「あなたにとってわが子はどんな存在ですか」と問いかけている。そしてそのことについて親子での意見交流が行われた。

講座を通して「親子のコミュニケーションが大切である」ことや「お互いの話を聞くことがコミュニケーション作りで大切である」ことを頭で理解し合うだけでなく、親子が休日にコミュニティハウスに集い交流し合い、お互いの話を聞く場面を作り出し、体験する内容にまで高まりを持たせた講座である。

(3) 事例の分析

この2例に共通していることは「親子一緒に講座であること」「『親プロ』教材を一部活用、または改作して活用した講座であること」「親子のより良いコミュニケーションの取り方について考えるだけでなく、コミュニケーションを実際に取り入れる内容の講座であったこと」である。

これまでの「親プロ」講座は、親を対象にした「親プロ」講座では「我が子の気持ちについて」を、生徒を対象にした「親プロ」講座では「自分の親の気持ちについて」を「寄って」「話して」「気づき」、「自分もそう思う」「そんな考え方もあったのか」「これをやってみよう」等、参加者一人ひとりが気づいて学んだことを何か一つでも家庭に持ち帰ってもらおうとするものであった。

事例紹介した2例は、親子一緒に対象にした「親プロ」講座で、親子別のグループとなって、一つのテーマについて話し合い、話し合ったことを交流し合う中で、親は子供の気持ちに気づき、子供は親の気持ちに気づき、気づいたことを交流し合うことで、お互いの良さや知らなかったことを知るようになる場と機会を実際に作り出したことが大きな特徴であり、成果である。

親子のコミュニケーションを図るための体験事業や講演会の聴講は全国各地で行われている。親子を対象にし、お互いの気持ちを言葉で交流し合う内容が、公民館職員や「親プロ」ファシリテーター、地域のプロジェクトチームから生み出されたことは、「親プロ」がまだまだ可能性を秘めた発展形であることを指し示すものであろう。

4 学校等での「親プロ」講座の新たな展開に向けて

(1) 親子で参加する「親プロ」講座に期待できる効果

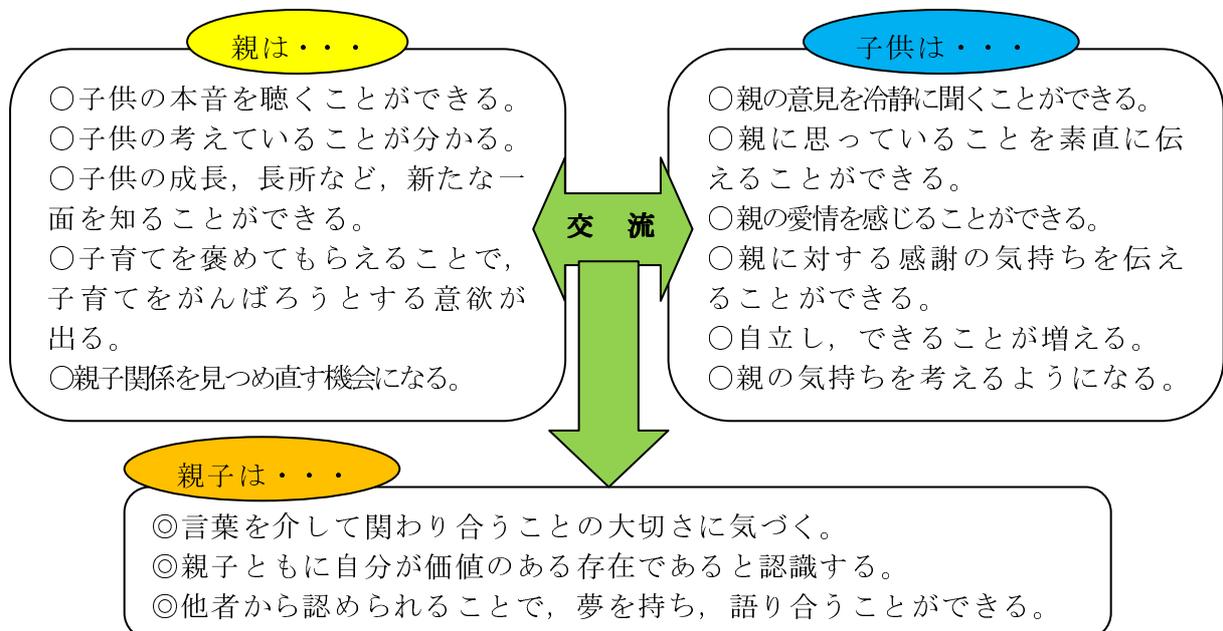
家庭は全ての教育の出発点であり、「会話を増やし、家族の絆を深める」「子供が愛されていると実感できるコミュニケーションをとる」など(参考文献⑥)、家庭での親密な親子のコミュニケーションが大切であると言われている。「親プロ」講座の参加者からも「子供とコミュニケーションを取ることが大切だと分かりました。」「子供の話や言い分をまず聞

こうと思います。」「子供の気持ちに寄り添って理解しようと思います。」という内容の感想が寄せられている。

しかし、家族と過ごすコミュニケーションの時間は、子供の年齢が上がるにつれて短くなり、親子とも「忙しい」ために、家族と過ごすコミュニケーションの時間はなかなか確保できないという実態がある（参考文献⑦）。また、「親子のふれあい時間」調査によると、親子の会話時間は増えながらも（参考文献⑧）、子供との会話内容は「先生」や「社会一般」という割合が増え、生活まわりや勉強関連は減少するなど口うるさい親は減っており、「友達親子」と称される現代の親子関係の傾向が見てとれるとされている（参考文献⑨）。ほとんどの親は、親子のコミュニケーションが大切だと頭では十分に理解し、会話の時間を確保しようと努力しながらも、日々の忙しさに追われ、なかなか思うようにはいかない毎日を過ごしている方も多いのではないだろうか。

そこで、「信頼」や「対話」という親子の親密な関わりにより、子供の自己評価を高め、良好な親子関係をより育むために、全ての子供が通い、その保護者が関わる学校という場を生かし、先述した親子で参加する「親プロ」講座のように、親子のコミュニケーションを図る場を意識的に作り出し、第三者を交え、日常生活では伝えることができない本音を、家とは違う空間でお互いに心を開いて伝え、また相手の気持ちを受け取る作業、つまり、親子で「対話」する機会を仕組みでいってはどうだろうか。

そうすることで、次のような効果を生むことが期待できると思われる。



(2) 親子で参加する「親プロ」講座の展開例

平成 25 年 2 月末に、広島市内で、教材番号 1 番を活用した大人と中高生の子供を対象にした「親プロ」講座が行われた。教材番号 1 番は、本来、中学・高校生などの青少年を

対象にした教材であるが、大人と中高生を一緒に実施したところ、大人にとって、今、親の立場として我が子に対する思いを振り返るだけでなく、自身の親が自分に抱いていたであろう気持ち呼び起こし、親として子どもを慈しみ育てようとする気持ちを再確認する機会になった。

また、中高生は、講座の合間に大人が発言する内容から「親（大人）にも子供だった時代があったんだなあ。」「大人も、自分たちと同じように、自分の親に対していろいろ考えていることがあるんだなあ。」ということを知り、「将来自分はどんな親になるのだろう。」と自分の将来を考えるよい機会となった様子であった。

この講座を参考に、教材番号1番を活用した親子で参加する「親プロ」の展開例を次に紹介してみたい。

対象（時間）：多感な時期を迎える時期の親子（100分程度）

おぎゃーってスゴイ！ ～生まれてきた自分、やがて生まれてくる命～

【ねらい】 卵を自分の子供に見立て、命の大切さと、親として命に関わることの責任の重さを実感するとともに、親子関係を振り返り、親または子供の気持ちについて考える。

【準備物】 学習者：筆記用具

主催者：名札、ワークシート、アンケート用紙、フェルトペン（油性など卵に書けるもの）、パック入り生卵（人数分＋ α ）、かご（保育所などに見立てる）、雑巾など（卵が割れた時の用意）

時間	アクティビティの展開	留意点	備考
：	○名札付け（来た順に）	○全員が名札をつける。（ニックネーム可）	※スケジュールを板書しておく。
： （5分）	○ファシリテーター（学習支援者） 自己紹介、主旨・ルールなどの説明	○和やかな雰囲気づくりに配慮する。 ○写真を撮る場合は、予め了解を取る。（肖像権） ○三つの約束（発言の平等、人の発言を肯定、秘密の保守）、ただし、言いたくないことは話さなくてもよい。（パス有り）	・机は講義形式
： （15分）	アイスブレイク（雰囲気づくり） 「あなたの誕生日は？」 ①言葉を交わさず、身振り手振りで誕生日情報をやりとりし、順番に並ぶ。 ②誕生日を口で言って、確認する。 「グループ分け」 一つのグループに大人と子供の数が同数になるように、グループを分ける。 「あなたが生まれたときは？」 ①お腹の中にいた頃、生まれた頃、名前の由来について思い出す。 ②子供が生まれた頃の日本、世界の出来事を紹介する。	○初対面の人同士の場合、自由に意見を出し合うためのウォーミングアップとする。 ○誕生日を確認することで、「生まれてきた自分」を感じてもらう。 ※あらかじめグループを決めておいても良いし、一円の誕生日順から、大人、子供別の二重円の誕生日順になり、番号を付した上で、グループ分けをしても良い。 ○全員で一つのテーマについて考えていくためのウォーミングアップとする。 ※「どんな出来事がありましたか？」と参加者に尋ねてみるも良い。	・机を撤去 ・グループ数に応じて、机を配置

<p>：</p> <p>(45分)</p>	<p>○タイトル，ねらいを読む。</p> <p><やってみましょう></p> <p>「ここに卵があります。それはあなたの子供です。さあ，一つずつ卵を手にとってください」</p> <p>② を手で温める。</p> <p>②生まれた子供に名前をつける。</p> <p>・ワークシートに記入し，卵の顔と名前を見せながら，グループ内で発表する。</p> <p>③かごに入れる。(全員)</p> <p>・ワークシートに記入し，話し合う。</p> <p>④みんなで輪になって卵を回す。</p> <p>⑥一周回ったらかごに戻す。</p> <p>・ワークシートに記入し，話し合う。</p> <p>⑦最後は卵をパックに戻す。</p> <p>・ワークシートに記入し，話し合う。</p>	<p>○テストではなく，ワークシートも回収しないので，時間をかけてゆっくり考えて書いてもらう。</p> <p>○卵を生まれてくる命と捉え，その大切さや危うさを実感してもらう。</p> <p>○手で温めながら名前を考える。</p> <p>※割れないように気を付ける。(割れた場合のコメントや対応を考えておく。)</p> <p>○名前とその理由をワークシートに書く。</p> <p>(卵にも名前を書く。)</p> <p>○三つの約束の確認をする。</p> <p>※かごに「○○保育所(園)」などと書いておくと良い。</p> <p>※全員で卵を回すことで，我が子に見立てた卵が長い時間をかけて多くの人に手渡っていく様子から，親の気持ちを想像する。</p> <p>※子供：成長していく子供を思う，親の気持ちを想像してみる。</p> <p>※親：自分の子供が幼稚園・保育所等に入った時の状況を思い出しながら記入しても良い。</p> <p>※親子：親に対する自分の気持ちを振り返ってみる。</p> <p>○左隣の人から受け取り，右隣の人に渡す。</p> <p>→いろいろな経験をして成長していく子供を見ていく親の思いを考えながら卵を回していく。</p>	
	<p>⑧子供：「自分の親に対してどのように思ったか」，「将来，どんな親になりたいか」をワークシートに記入し，話し合う。</p> <p>親：「自分の親や自分の子に対してどう思ったか」ワークシートに記入し，話し合う。</p> <p>⑨⑧について意見交流をする。</p>	<p>※グループを外し，全員で一つの輪になって回しても良い。</p> <p>※卵を回しながら，卵に書かれた顔を見て感想を述べ合っても良い。</p> <p>※卵を大切に扱っていると思われる子供，親の行動，視線を取り上げて褒める。</p> <p>○子供：親の子どもを思う気持ちに気付いたり，「親になる自分」を想像したりする。</p> <p>○親：親になった現在，かつては自分も子供だったことを振り返り，親の気持ちを振り返るとともに，今後，自分はどんな親でありたいかを考える。</p> <p>⇒親子関係を振り返り，親または子供の気持ちについて考える。</p>	
<p>：</p> <p>(20分)</p>	<p><学習を振り返りましょう></p> <p>○ワークシートに記入し，話し合う。</p> <p>○グループごとに発表</p> <p>○ファシリテーターの話</p>	<p>○疑似体験を通してどんなことを感じたか，自由に話し合う。</p> <p>※時間があれば，一人ずつ発表してもらっても良い。</p>	
<p>：</p> <p>(10分)</p>	<p>○フリートーク</p>	<p>○お茶を飲みながら，グループ内で歓談をする。</p>	
<p>：</p> <p>(5分)</p>	<p>○終了，片づけ</p>	<p>→全員で行う。</p>	<p>・現状復帰</p>
<p><メモ></p>			

(3) 学校等における親子で参加する「親プロ」講座のすすめ方について

「親プロ」講座のすすめ方については、『学習のすすめ方』にまとめられているとおりが、親子で参加する講座を行うに当たり、特に必要だと思われる点について以下にまとめておく。

○講座の計画について

学校では、年間指導計画や行事予定に限なく組まれており、新しいことを行うには手間や労力やかかると考えられる。そこで、学校行事の一部を変更し実施してはどうだろうか。例えば授業参観である。学校での子供の様子を保護者が見て知ることでも大事であるが、親子や担任がゲームやグループワーク、共同作業を通じて、触れ合い、親睦を深め合うことで、クラス紹介になり、お互いを知ることにもつながると思われる。

また、授業参観後の学級懇談会では、保護者にとっては、学級の様子を知り、担任と信頼関係を作り、他の親との関係づくりを行う機会となっている。最近では、構成的グループエンカウンターを行う懇談会も増えてきていると思われるが(参考文献⑩)、教員と保護者、保護者同士がつながりあうことはもちろん、教員、保護者、子供が一緒になって一つのテーマについて語り合い、お互いの気持ちを交流し合う機会を持ってみてはどうだろうか。そのことが三者の関係づくりに役立つと思われる。

○ファシリテーターについて

平成25年度にPTA主催で行われた「親プロ」講座の参加者から寄せられた意見で「学校の先生方やPTA役員がディスカッションの進行をしても、保護者の意見は出にくく、うまくはいかない。第三者の方が進行をしてくださることで、たくさんの活発な意見が出されていて、とても良かったと思う。」という声があった。

教員は、教育のプロとして、専門的な見地から保護者への適切な助言、ここだけは絶対にお願ひしたいという点を伝えていくことももちろん大切だが、そういう関わりだけでは「親や子供の本音が引き出せない」こともあるかもしれない。「本音を語り合う」ためには、教職員以外の第三者がファシリテーターを務めることが望ましい。教員も一人の保護者、または大人の立場になって講座に参加することで、保護者は親近感を感じ、子供は「先生もこんな悩みがあるのだな」等、大人への新たな気づきを生み出すと思われる。

○ねらいの確認について

親子で参加する「親プロ」講座を実施する際には、なぜ行うのか、どんなことを行うのか保護者や子供に事前に丁寧に説明しておくことが必要だと思われる。学校が、保護者と子供とが対話しながら気持ちをやりとりすることは人間関係を構築する上で大切なことであり、人間関係の最小単位である親と子がそれを行うことに意味があることを説明することは、立派な家庭教育支援の一つであろう。また、継続的に講座を実施し、同じことを繰り返し伝えることで得られることもあるだろう。

○講座時間について

『学習のすすめ方』には、100分～120分の展開例が記されている。親子で参加する講座においても同等の講座時間を確保したい。学校で保護者対象に行われる「親プロ」講座は、参観日や説明会と抱き合わせで行われることが多く、中には30分での講座も実施されたこともあるが、参加者の感想には「もっと話す時間が欲しかった。」とあった。保護者や子供が十分話したけれど、少し物足りない、もっと話してみたいと感じる程度の講座時間を確保したい。

○グルーピングの工夫

子供だけのグループを編成する場合、事前にグループを指定しておく工夫が必要である。子供は周りの影響を受けやすく、グループの構成メンバーによっては、意見を同調したものに変わってしまうことが考えられる。参加者の様子を踏まえながら、グルーピングを工夫したい。

○展開を工夫する

先述した2例の事例でもそうだったように、「親プロ」ワークシートや展開例をそのまま実施するのではなく、参加者とねらいに応じた問いかけを工夫し、教材を一部活用、又は改作するなどの工夫が必要である。エピソードを保護者や子供による寸劇にするだけでその場が和むものとなる。雰囲気づくりも含め、展開を工夫することが望ましい。

また、「親子合宿」(参考文献⑩)のような取組を学校や社会教育施設で行なってみてはどうだろうか。「親子合宿」は課題を抱える親子を対象にした事業であるが、特別に課題を抱えていなくても、別の家族と一緒に、親子が寝食を共にしながら、自然体験の中で協力が求められる共同作業を行い、人間関係づくりを行い、それらの活動を通してお互いを感じたことを言葉で振り返り、親は親同士で子どもについての悩みや思いを他の親と共有する機会を持つことで、親子それぞれに意味を与えるものはきっとあると思われる。学校で子どもを対象にした野外活動体験は行われているが、親子一緒にプログラムを作ってみてはどうだろうか。いずれにせよ、親子のコミュニケーションを図る場を意識的に作り出すことが求められる。

6 おわりに

『非行臨床から家庭教育支援へ』では、「新たな家庭教育の用語概念の構築」の「『子どもに対して』をとらえ直す」の中で、「親が子供を教育するためには、いかに親が子どもに関して持つべき正しい知識を持っていたとしても、そこに望ましい親と子の人間関係、コミュニケーションが成り立っていなければ、子どものための子どもに対する教育が成り立たない」とし、「家庭教育支援とは、親に対して自らの対人感受性を高め、対話的な関係を形成していく力を促進していく活動である」と記されている。(参考文献⑦)平成19年度版の国民生活白書では、「子ども時代において親と豊富な会話を持つことや一緒に体験す

ることを通じてのコミュニケーションは、子どもの知的好奇心を育むだけでなく、大人になってからの行動にも少なからず影響がある」と記載されている。

親子のコミュニケーションが大切であることは頭では理解されている。しかし、理解で終わるのではなく、全ての子供が通い、親も関わる（関わらざるを得ない）学校がお互いの思いや気持ちを伝え合う親子のコミュニケーションの必要性を保護者と子供に呼びかけ、そこに地域の力を巻き込んで学習機会を意識的に作り出すことが、家庭教育支援を担う教育行政の役割であると言えないだろうか。その繰り返しが、子供たちの心を育み、親に安心感を与え、将来、自立した子供や若者を社会に多く羽ばたかせることにつながりはしないだろうか。

そうした学びの場に参加しない、できない親ももちろん存在するだろう。しかし、親子のコミュニケーションを図る場を作り出し続け、参加を促し続けていくことも「本当に届けたい人に届ける」ための立派な家庭教育支援であると言えはしないだろうか。

親子一緒を対象にした「親プロ」講座が学校等で行われ、保護者や子供、社会教育に携わる人々、教員、「親プロ」ファシリテーター等で、その講座の内容がよりよくその形を発展させていった時に、広島県の子供や若者が家庭・学校・地域のネットワークの中で、自立に向け、健やかに成長し、生き生きと社会生活を行うことにつながっていくだろう。

参考・引用文献および参考URL

- ① 「広島県子ども・若者計画」平成24（2012）年3月
- ② 松田愛子『『親の力』をまなびあう学習プログラム』を持続可能な取組としていくために～ファシリテーターの果たす役割を中心に～ 平成25年
- ③ 山野則子『よくわかるスクールソーシャルワーク』ミネルヴァ書房、2012年
- ④ 家庭教育の推進に関する検討委員会「つながりが創る豊かな家庭教育～親子が元気になる家庭教育支援を目指して～」平成24年3月
- ⑤ 広島市電子メディア協会
(<http://www8.plala.or.jp/hiroshima-denme/denme.htm> : 平成26年3月10日参照)
- ⑥ 文部科学省「家庭教育手帳 小学生（高学年）～中学生編 ー広島県版ー」平成20年
- ⑦ 呉市教育委員会「呉市 親子コミュニケーション能力開発事業 親子のコミュニケーションに関するアンケート結果報告書」平成21年8月
- ⑧ CITIZEN 意識調査「親子のふれあい意識調査」
(<http://www.citizen.co.jp/research/time/20120604/> : 平成26年3月10日参照)
- ⑨ PRESIDENT Online
(<http://president.jp/articles/-/6720> : 平成26年3月10日参照)
- ⑩ 國分康孝・國分久子『エンカウンターで保護者会が変わる 中学校』図書文化、2009年
- ⑪ 村尾泰弘「非行少年少女と家族、親子体験」「課題を抱える子どもの体験活動に関する

調査研究（報告書）」国立青少年教育振興機構，平成 25 年 3 月

- ⑫ 山本智也『非行臨床から家庭教育支援へ ～ラボラトリー・メソッドを活用した方法的研究～』ナカニシヤ出版，2005 年
- ⑬ 広島県教育委員会「保護者，地域と学校の協力のために【保護者等対応事例集】」平成 25 年 12 月
- ⑭ 斎藤嘉孝『親になれない親たち 子どもの原体験と，親発達の準備教育』新曜社，2009 年